

令和2年度 総合部会研究計画

1 研究主題

自己の生き方を考えていく資質・能力の育成を目指して
—主体的・協働的に取り組む探究的な学習の充実—

2 研究主題・副主題について

(1) 研究主題設定の理由

社会や経済は、急速に変化しており、予測困難な時代となっている。このような時代を生きる子供たちには、自分のよさや可能性を認識し、試行錯誤しながらも新しい未知の課題に、異なる多様な他者と協働して対応し、自己の生き方を考えていくことが求められている。今年度全面実施となった学習指導要領では、これからの時代を生きる子供たちに必要な資質・能力を育成するため、すべての教科等の目標及び内容が、三つの柱に再整理された。総合的な学習の時間においては、その目標が次のように示され、各教科等で育成する資質・能力を実社会や実生活において活用すること、各教科等を超えた学習の基盤となる資質・能力を育成することが求められている。

【 目 標 】

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。(知識及び技能)
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。(思考力、判断力、表現力等)
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。(学びに向かう力、人間性等)

各学校は、目標を実現するにふさわしい探究課題を設定するとともに、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力を設定する必要がある。そこで、本部会においては、「自己の生き方を考えていく資質・能力の育成を目指して」をテーマに、研究を進めていくこととする。

(2) 主体的・協働的に取り組むとは

探究的な学習を充実するためには、課題の解決に主体的・協働的に取り組むことが必要である。

主体的に取り組むとは、よりよい解決のために、見通しをもって自ら計画を立てて学習に向かうことである。具体的には、どのように情報を集め、どのように整理・分析し、どのようにまとめ・表現を行っていくのかを考え、実際に社会と関わり、行動していく姿として表れるものである。

また、課題の解決には他者と協働的に取り組むことも重要となる。対話的に多様な他者と関わり、協働して活動を行うことにより、学習活動が発展したり、課題への意識が高まったりする。異なる見方があることで、解決への見通しがつかみやすくなり、異なる意見を生かして新たな知を創造することができる。

児童が主体的・協働的に学習に取り組む中で、互いの資質・能力を認め合い、相互に生かし合う関係が期待される。さらに、社会に積極的に参画したり貢献したりする資質・能力を育成することにもつながる。

令和元年度の研究会会場校の鳴門市第一小学校では、「子どもも教師もとことん本気になる学び」というテーマのもと実践を行った。その成果として、自らが設定した課題を自分の事として捉え、本気になって学習活動に取り組み、協働して課題を解決しようとする児童や教師の姿が見られた。

(3) 探究的な学習の充実とは

探究的な学習とは、問題解決的な学習が発展的に繰り返されることであり、その中で「探究的な見方・考え方」を働かせることが必要である。「探究的な見方・考え方」とは、各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会や実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続けるという総合的な学習の時間の特質に応じた見方・考え方である。児童が「探究的な見方・考え方」を働かせながら学習に取り組むことで、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することにつながるのである。

探究的な学習を充実したものとするために、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を重視する。本年度はその中でも、児童が探究的な学習に主体的・協働的に取り組み、目指す資質・能力を養うことができる単元となるように見直す。単元の作成においては、各学校の実態に応じた目標を実現するにふさわしい探究課題を設定することが必要である。(下表参照) また、その単元が児童にとって意味のある課題の解決や探究的な学習活動のまとめりとなるように計画することが大切である。

探究的な学習が充実することにより、各教科等で育成された資質・能力は繰り返し活用・発揮される。それによって、生きて働く「知識及び技能」として習得され、未知の状況にも対応できる「思考力,判断力,表現力等」が育成され,学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力,人間性等」の涵養につながるのである。

探究課題の例			
横断的・総合的な課題	地域にクラス外国人とその人たちが大切にしている文化や価値観 (国際理解)	地域や学校の特色に応じた課題	町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織 (町づくり)
	情報化の進展とそれに伴う日常生活や社会の変化 (情報)		地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々 (伝統文化)
	身近な自然環境とそこに起きている環境問題 (環境)		商店街の再生に向けて努力する人々と地域社会 (地域経済)
	身の回りの高齢者とその暮らしを支援する仕組みや人々 (福祉)		防災のための安全な町づくりとその取組 (防災)
	毎日の健康な生活とストレスのある社会 (健康)		など
(現代的な諸課題)	自分たちの消費生活と資源やエネルギーの問題 (資源エネルギー)	つく課題 児童の興味関心に基	実社会で働く人々の姿と自己の将来 (キャリア)
	安心・安全な町づくりへの地域の取組と支援する人々 (安全)		ものづくりの面白さや工夫と生活の発展 (ものづくり)
	食をめぐる問題とそれに関わる地域の農業や生産者 (食)		生命現象の神秘や不思議さと、そのすばらしさ (生命)
	科学技術の進歩と自分たちの暮らしの変化 (科学技術)		など

3 研究の視点と内容

(1) 目標と内容の設定及び指導計画・単元計画の作成

各学校において、育てたい児童像や資質・能力及び態度を明確にした目標及び内容を定めることが大切である。その際、各学校における教育目標を踏まえることが求められている。目標の実現に向けて指導計画が適切に機能するためには、内容について、探究課題としてどのような対象と関わり、その課題の解決を通して、どのような資質・能力を育成するのかを記述することが必要である。各学校において、カリキュラム・マネジメントを通して各教科で身に付けさせたい資質・能力を関連付け、効果的な教育課程を編成する。

①目標及び内容の設定

- ・各学校における教育目標を踏まえ、育成を目指す資質・能力を示した目標を設定する
- ・日常生活や社会との関わりを重視する
- ・地域や学校の特色、児童の興味・関心に基づく探究課題を設定する
- ・探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力を三つの柱に沿って示す

②意図的・計画的・組織的な年間指導計画の作成

- ・児童の学習経験に配慮し、4年間を見通して、年間指導計画を作成する
- ・資質・能力の視点から、各教科等との関連を明らかにする
- ・外部の教育資源の活用及び異校種との連携や交流を意識する
- ・課題の解決につながる体験活動を適切に位置づける
- ・児童の学習状況を把握し、計画の見直しを適宜行う

③児童の実態に即した単元づくり

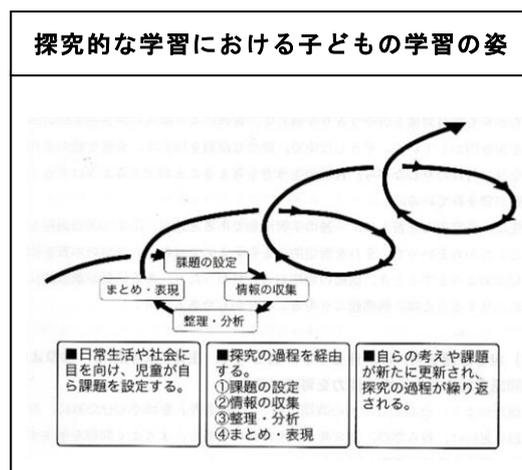
- ・児童の関心や疑問を生かして単元を構想する
- ・教師が意図した学習を効果的に生み出す単元を構成する

(2) 探究的な学習の指導

総合的な学習の時間には、対象に直接触れる体験活動から課題設定を行うことが、そのあとの息の長い探究的な学習活動の原動力となる。その解決のために、異なる考えをもつ多様な他者と協働して主体的に学習活動を行うことで、互いの考えを深め、事象に対する認識が深まり、学習活動をさらに探究的な学習へと高めていく。協働して学習活動に取り組むことが、児童の探究的な学習を持続させ発展させるとともに、一人一人の児童の考えを深め、自らの学習に対する自信と自らの考えに対する確信をもたせることにもつながる。

①探究的な学習過程

- ・探究の過程（【課題の設定】【情報の収集】【整理・分析】【まとめ・表現】）を発展的に繰り返す
- ・【課題の設定】実社会や実生活に関わる体験をすることで、自ら課題意識をもつことができるようにする



- ・【情報の収集】様々な情報を蓄積する中で、体験を通じた感覚的な情報も大切にする（例：言語化）
 - ・【整理・分析】「比較して考える」「分類して考える」「序列化して考える」「関連付けて考える」「原因や結果から考える」などの「考えるための技法」を意識し思考を可視化できるようにする
 - ・【まとめ・表現】相手意識や目的意識を明確にしてまとめたり、表現したりすることで、情報を再構成し、自分自身の考えや新たな課題を自覚できるようにする
- ②他者と協働して主体的に取り組む学習活動
- ・異なる多様な他者と協働して、主体的に学習活動を行う場を設定する
 - ・多様な情報を活用して協働的に学ぶ
 - ・異なる視点から考え協働的に学ぶ
 - ・力を合わせたり交流したりして協働的に学ぶ

(3) 学習評価の充実

学習評価は、教師が指導の改善を図るとともに、児童が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするものである。そのためには、学習評価の在り方が重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性をもった形で改善を進めることが求められている。また、児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価することにより、児童自身が学習したことの意義や価値を実感することができるようにすることが大切である。

- ①各学校において育てたい資質・能力の明確化
- ・各学校において定める目標や内容に基づいた資質・能力を明確にし、学校としての評価の観点や評価規準を設定する
 - ・年間や単元など内容や時間のまとまりを見通しながら評価場面や評価方法を工夫し、指導の改善や児童の学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かす
- ②長期的、共感的、多面的な評価方法
- ・学習過程や年間を通しての児童の変容や成長を適切に評価する
 - ・児童一人一人が学習を振り返る機会を適切に設け、自分のよい点や進歩の状況に気付くことができるようにする
 - ・多様な評価方法を適切に組み合わせる(表現による評価・観察による評価・制作物による評価・ポートフォリオによる評価など)
 - ・多様な評価者による評価を行う(自己評価や相互評価、協力者等による他者評価など)

参考文献 「平成 29 年 7 月 小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 総合的な学習の時間編」